「下塗りをおろそかにしては、あつみのある、 ぽってりとした色は出ません」

漆の下塗りをする。二カ月ほど寝かせてからまた下塗りをする。五度も六度も下塗りを繰り返す。そういう丁寧 な仕事のあとに、 使えば使うほど底づやの出てくる漆器を作るには、下塗りが大切です。まず豆汁を塗って下地を作る。 谷正利はそんな表現で、下塗りの大切なことを強調していました。谷は飛驒高山に住む、 上塗りをします。 あのやや黄みをおびた琥珀の色つやはそうして生まれるのです。 春慶塗りの名手です。 ついで

文章でも、同じことがいえるのではないでしょうか。

## 1

深くなります。 穴を掘ります。 土のうえに直径一メートルの円を描き、その円内で円錐状の穴を掘ります。 どちらがより深く穴を掘ることができるか。 いうまでもなく、 円が大きければ大きいほど、穴も 次に直径五メート の円を描いて

から思い切って広い円を描いて準備をすれば、内容の深いものが生まれます。 ものを書くときは準備が大切です。小さな円を描いたのでは、 それだけのもので終わってしまいます。 はじめ

と、言葉でいうのは簡単ですが、土を掘れば石ころもある。 人はともすれば易きにつきがちです。 つい小さな穴ですまそうとする。 木の根っこもある。そういうものと根気よく格闘

んで一冊買ってきてぱらぱらとめくって、それだけで書き始めても小器用な人ならある程度のことは書けるでし しかし小さな穴でごまかした文章は、 結局はそれだけのものです。 「一冊の本」という題で文章を書く。

## 2

後者を選びます。 小器用にまとめられた文章がいいか。多少たどたどしくても深みのある文章がいいか。 ためて読んだときの違いなんかを書く。 別の人は、 昔から大好きだった本のことを書く。 たとえ表現がまずくても、 五回も六回も読んだ本です。 深い ものが書けるはずです。 十年前に読んだときと今度あら 私はためらうことなく、 うすっぺらでも

## 3

ことを書く、というクンレンを己に課しなさい。 る人は、稽古を一日怠るだけで後戻りをするとい 新聞社の試験を受けたいという若い人に会うと、私はこういいます。「日記をつけなさい。 たのしんで書けるようになればしめたものです」 います。 書くクンレンも同じです。 なんでもいいからその日の 踊りのシュギョウをす

作家の池波正太郎は「食べもの日記」を欠かさなかったそうです。何十年も、毎日、食べたものを書きとめて というからソウトウなものです。

- 一、トウフの味噌汁、飯、納豆、香の物(ナス)
- 二、牛肉アミ焼き、冷酒、サワラの塩焼き

三、きつねうどん

料理にはしるしをつけておく。 という具合です。 一、二、三というのは池波流の表現で、 レストランで食べたときは場所と同席者の名前を書いておく。 第一食、 第二食、 第三食の意味です。 おいしかった

はみな、 鬼平の話にせよ、 いかにもうまそうで、 仕掛人・梅安の話にせよ、 季節のこまやかな味がでています。「食べもの日記」のせいでしょう。 よく食べものの話がでてきます。 作品にトウジョウする食べもの

「冬に深川の家へ遊びに行くと、三井さんは長火鉢に土鍋をかけ、 大根を煮た。

土鍋の中には昆布を敷いたのみだが、 これを気長く煮る。 厚く輪切りにした大根は、 妻君の故郷からわざわざ取り寄せる尾張大根

煮えあがるまでは、これも三井さん手製のイカの塩辛で酒をのむ。柚子の香りのする、うまい塩辛だった。 大根が煮あがる寸前に、三井老人は鍋の中へ少量の塩と酒を振り込む。

そして、大根を皿へ移し、 醤油を二、三滴落としただけで口へ運ぶ。

大根を噛んだ瞬間に

「む……」

広い円を描いているからこそ自然に生まれてくるのでしょう。 りの大根をすぐにでも食べてみたいという気になる。こういうさりげない食べもののビョウシャも、日ごろから なんということはない。大根の輪切りにしたやつを煮るだけの話ですが、池波の手になると、煮あがったばか いかにもうまそうな唸り声をあげたものだが、若い私たちには、まだ、大根の味がわからなかった」

形師の言葉を聴いて、 坐って、一日中、 作家の宇野千代は、 ノミを使って木を刻みます。「十六の年から、こうして毎日、 宇野は思います。 ある日、天狗屋久吉という阿波の人形師に会いました。 そうだ、毎日、書くのだ、 ٤ 八十すぎの人でした。 木を刻んでましたのや」という人 彼は縁側に

宇野が非凡なのは、 思っただけではなく、 それを実行したことです。

だ。すると、ついさつきまで、 気がするから不思議である。 「書けるときに書き、書けないときには休むと言ふのではない。書けない、 今日は一字も書けない、と思つた筈なのに、 ほんの少し、 と思ふときにも、机の前に坐るの 行く手が見えるやうな

いっています。 人形師が毎日縁側に坐るように、 毎日、 必ず、 机の前に坐る、 そうすればおのずから文章が書ける、 と字野は

(辰濃和男『文章の書き方』)

も字数に入ります。) (解答について、語群より選択の場合は、符号で答えなさい。また記述の場合、とくに指示のないときは、 句読点

- 問一 文中の ==== 部 アーオを漢字に改めなさい。
- 間二 次の文の入る箇所を、[ ]部1~5の番号で答えなさい。
- A 広い円を描くことの実際的な方法に、たとえば日記があります。
- B 別の言葉でいえば、こういうことです。
- こんな文章があります。
- 問三 部1はどのような色のことか文中の言葉を使って答えなさい。
- 問四 文中の漢字二字で答えなさい。 部 2の「大きなアフ「円」、イイフ「穴」」は本文の主題にそくしていえばそれぞれなにの比喩か。
- 問五 ――― 部 2の「円」に相当するものを三つ選びなさい。
- ア 何回もうるしの下途りをする
- イ 食べもの日記をつける
- エ 大根を長時間煮る

土鍋に昆布を敷く

- オ 毎日ノミを使う
- カ 気のむいたとき机に座る
- キ 小器用にまとめた文章を書く
- ク 試験を何回もうける
- 問六 宇野千代は阿波の人形師の「アどのような行為から」(1何を学んだのか。文中の言葉を使って答えなさい。
- 筆者は日記を書くことをすすめている。その理由を、 文中より二五字以内で抜き出しなさい。

<b>97530 ii b86</b> 6000	9 P O D D O O D O O D O
<b>鹿敵鳥餅木</b> す人 物非利物無他本思次	
鹿をあう者は山を見 たる。 は、一般の は、一般の は、一般の を、こう。 は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、一般の は、他の は、他の は、他の は、他の は、他の は、他の は、他の は、他の は、他の は、他の は、他の は、本、に、ば、から は、な、に、ば、から は、な、に、ば、から は、な、に、が、の は、な、に、は、から は、な、に、は、から は、な、に、は、から は、な、に、は、から は、な、に、が、な、に、が、の は、な、に、は、から は、な、に、な、に、が、の は、な、に、は、から は、な、に、が、な、に、が、の は、な、に、が、な、に、が、の は、な、に、な、に、が、な、に、が、な、に、が、ない。 は、な、に、な、に、が、ない。 は、な、に、な、に、が、ない。 は、な、に、な、に、な、に、が、ない。 は、な、こう。 は、な、に、な、に、な、に、が、ない。 は、な、に、な、に、な、に、な、に、が、ない。 は、な、に、な、に、な、に、な、に、な、に、な、に、な、に、な、に、な、に、な、	□ 臨 自 我 □ 竜 □ 相 自 公 虚 不 □ 息 新 □ 次 の □ を □ 日 回 □ 日 □ 日 □ 日 □ 日 □ 日 □ 日 □ 日 □ 日 □
う 能 里 屋 り か て う 都 迷 す 望 こ 目 け 味 者 寺 の て 者 ぃ ゕ 合 う べ み と 的 な に	
は こ 魚 のな つが者て ° にはいあ 山 う を いい ナトは専 ば他出て	
度を逐う者は山を見ず を逐う者は山を見ず を変う者は山を見ず たる。 は一次の意味にあてはまる。 を本当の目的は他のとこれがけない出来事に をある。 本当の目のは他のとこれがはない所でした。 ないがけない出来事に をある。 ないがけない出来事に をある。 ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがけない出来事に ないがないがない所でしまる。	日 日 切 分 分 の め が 削 す い 分 が 心 党 分 情 旧 語 し 場 の に 場 は 一 だ ぐ も で 正 の ー ・の が が に
度を逐う者は山を見ず ⑩ 8 像なき里のこうもりである。 本当の目的は他のところにはかり気をといれた者のいないところにない。 お事にすべて専門家に任せる物事にうかつである。 か事にうかつである。 か事にうかつである。 か事にうかつである。 か事にうかつである。 ② 本に縁りて魚を求む でんの見ていない所でしても変がは餅屋 ② 本に縁りて魚を求む の	一次の四字の熟語について、次の四字の熟語について、次の四字の熟語について、
度を逐う者は山を見ず ⑩ 翻覧の の見ていない所でしても意味が 本当の目的は他のところにある。 他人のことにばかり気をとられ、 本当の目的は他のところにある。 物事にうかつである。 非常に都合がよい。 非常に都合がよい。 の見ていない所でしても意味が すぐれた者のいないところで、の が事にうかつである。 の見ていない所でしても意味が なき里のこうもり ⑥ 芋の のは本能寺 ② わな のは本能寺 ③ 優厚	の熟語について、下の (新旧が交代し、たい (事情が突然変わって、自分の主義主張やに (自分の主義主張やに (一党一派に組しない (一党一派に組しない (一党一派に組しない (本が正しく依怙贔屓 (心が正しく依怙贔屓 (をずぐずしていて、 (をがでずしていて、 (をがかってをない。) (をがいまのが進歩しない。 (その場にうまく適応くでの場にからまく適応で、何のととない。) (その場にもよく取りであるとない。)
度を逐う者は山を見ず (1) 指屋の白ばかまたを逐う者は山を見ず (10) 指屋の白ばかままを変う者は山を見ず (10) 指屋の白ばかままを変う者は山を見ず (10) 指屋の白ばかままを変う者は山を見ず (10) 指屋の白ばかままたの御は本能寺 (10) にかままたの御は本能寺 (10) にかままたの御は本能寺 (10) にかままたの御は本能寺 (10) にかままたの御はから、かまらない。	の熟語について、下の()の意味と(新旧が交代し、たえず新しくない。(事情が突然変わって、事のきまい。(自分の主義主張や信念をもたず、(自分の主義主張やはないたとえ)(が正しく依怙贔屓がなく、私に(治いものが進歩しないたとえ)(がずぐずしていて、なかなか決断(をの場にうまく適応し、すばやと(をの場にうまく適応し、すばやと(その場にうまく適応し、すばやと(その場にうまく適応し、すばやと(その場にうまく適応し、すばやと(その場にうまく適応し、すばやと(をの場にうまく適応し、すばやと(をの場にうまく適応し、すばやと(をの場にあるよく取り計らうこと)(をの場に最もよく合った上手なや(をの場に最もよく合った上手なや)(遠回しにせずに、すぐ問題の中心(遠回しにせずに、すぐ問題の中心
#	「 でっい 計 しわ 言なない ほが先た 念、でんずん 間 たがら、りいいかためなると
	題上自うすがたもなるとももある。
おとからそれぞれ選び、その番もとからそれぞれ選び、その番もとからそれぞれ選び、その番もない。 のがよい。 つきまえない。 やきまえない。 おいの者がはばをきかす。 神子の者えたの御存知ないか 様の下の舞い	の熟語について、下の( )の意味を考え、□に補う漢字を記せ。(事情が突然変わって、事のきまりが急に片付くたとえ)(自分の主義主張や信念をもたず、人の言動につられて行動する(自分の主義主張や信念をもたず、人の言動につられて行動する(自分ではない、 (中党一派に組しないたとえ)(が正しく依怙贔屓がなく、私、心がないこと)(が正しく依怙贔屓がなく、私、心がないこと)(おいものが進歩しないたとえ)(おが一貫せず、何を言いたいのかわからないたとえ)(を可場にうまく適応し、すばやく機転をきかすさま)(自分に都合よく取り計らうこと)(をの場に最もよく合った上手なやり方をすること)(をの場に最もよく合った上手なやり方をすること)(意回とにせずに、すぐ問題の中心にふれていくこと)
知には、て選	にりつ 機こわとしと 心がわ 人のさまま
ψ· • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	れをく をのか なだ り ここ スペート ないか またい こうしん ないか またいこ
。 か き れ そ か な の	して ない と こと
番号	できま) ない できま) できま) できま) かない できる かない かない かんと さんしょう きょう かんしょう はん しんしょう はんしょう はんしょ はんしょ はんしょう はんしょ はんしょ はんしょう はんしょう はんしょう はんしょく はんしょ はんしょく はんしょ はんしょく はんしょく はんしょく はんしょく はんしん はんしょく はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんしん はんし
かれない。 を を を を を を を を を を を を を を を を を を を	考え、□に補う漢字を記せ。 大の言動につられて行動する 人の言動につられて行動する が急に片付くたとえ) いがないこと) とえ) とえ) とえ) とえ) ことのたとえ) ことのたとえ) ことのたとえ) ことのたとえ) にふれていくこと)
रें -	直なります。
	(心) する せ。